

モノと情報班 雲南県誌グループ

生活文化のなかの動物 雲南の県誌に見る生態観の変遷

長谷千代子（総合地球環境学研究所プロジェクト研究員）

キーワード：中国 動物 近代化 生態観

Animals in Human Culture: On the Change of the Ecological View Seen in Annals of Yunnan Province

Nagatani Chiyoko (project research fellow, RIHN)

Keywords : China, animals, Modernizaion, ecological view

要旨

今回この研究所で研究する機会を得て私が取り組みたいと考えているのは、中国における近代化のなかで、雲南省における人々の生態環境との具体的な関係およびその関係についての認識がどのように変わってきたのかという問題である。具体的には、雲南省内の各県が出している県誌資料を利用しつつ、様々な動物と人間との関係に注目して考察を深めていくことを考えている。

1. はじめに

今年度から雲南省の生態史に関するプロジェクトに参加するに当たり、今後の見通しを述べたい。これまで私が研究してきたのは、中華人民共和国が成立したここ 50 年の間に、少数民族の人々の宗教や風俗習慣がどのように変容してきたかという課題であった。この間少数民族の生活に影響を及ぼした大きな力としては、中華人民共和国の少数民族政策、文明化や近代化といった社会進化論的な思想傾向、地球規模のスケールで進行するグローバル化などがあり、それらの複合的な過程は少なからぬ矛盾を孕んでいた。つまり社会進化論的な思想には少数民族の暮らしを漢化ないし欧米化する傾向がある一方で、少数民族政策は伝統的な生活様式の尊重を提唱しており、その上にグローバル化は社会主義的な国家理念の頭越しに経済や情報や人の移動といった側面からさまざまな予想外の変容をもたらしたのである。そうしたさまざまな価値基準を同時に突きつけられるなかで、少数民族の人々は今までの生活のなにを守り、なにを棄てるのか、新たになにを受け入れるのかといった問題に直面せねばならず、しかもその選択が必ずしも望んだような結果にならない不安定な状況を生き抜いてきた。現在の少数民族の暮らしはそうした様々な条件と試行錯誤の歴史的な集積であり、今なお刻々と変容しつつある。

今回この研究所で研究する機会を得て私が取り組みたいと考えているのは、こうした近代における変容のなかで、人々の生態環境との具体的な関係およびその関係についての認識がどのように変わってきたのかという問題である。この問題に取り組むことによって、人々の生態環境認識と現実の生態環境との関連性が明らかになれば、今後われわれが実践すべき生活様式や理念の構築に向けて、一定の示唆が得られるのではないかと考える。具体的な方法としては、雲南省内の各県が出している県誌資料を利用しつつ、様々な動物と人間との関係に注目してそのマクロレベルでの変容を明らかにし、自分のフィールドである雲南省徳宏のタイ族というマイクロレベルの事例と結びつけて考察を深めていくことを考えている。

2. いくつかの事例

雲南の県誌は現在データベース化の作業途上であり、量的にも膨大なため、私自身が現在までに参照できたのは全体の 3 分の 1 にも満たない。しかしそれだけの資料からも、雲南において人間と動物の関係がどのように変容してきたのか、その一端をうかがうことはできる。

1) ブタ

ブタは中国ないし雲南における代表的な食用の家畜の一つである。ミャンマーと国境を接する徳宏タイ族ジンポー族自治州のタイ族も、少なくとも民国期には大部分が普通にブタを飼い、食用にしていたようである。例えばラオスでラーブと呼ばれているのと同様の生の豚肉を使った料理が、タイ族独特の料理として有名である。瀾西県誌によれば 1952 年の段階で、全県に 5.5 万頭以上のブタが飼育されており、これは農業人口一人当たり 0.67 頭分に相当し、基本的には地産地消で需要と供給のバランスは過不足なかった [雲南省瀾西県誌編纂委員会編 1993: 118]。しかしその後「人々の生活レベルが向上し、市場の需要が高まった」 [雲南省瀾西県誌編纂委員会編 1993: 118] ため、政府はブタの増産に取り組み始める。大躍進や文化大革命での稚拙な政策はむしろ逆効果であったが、1978 年以降は科学的な飼育方法を普及させ、1988 年には全県での飼育頭数は 14 万頭を越え、一人当たりの比率も 0.56 頭に回復した。

ここで興味深いのは、こうした施策がタイ族の宗教実践に影響を及ぼしたことである。徳宏のタイ族には上座仏教の信仰が広く見られるが、そのなかにはゾーディ派やドーリエ派といった比較的厳格な教派があり、殺生戒に触れる恐れがあるとして特に食用の家畜を飼うことを禁じていた。徳宏州政府は解放後、生産性を向上させるためにこうした習慣を改めさせようとし、特に文化大革命では宗教を迷信として退け、かなり積極的にニワトリやブタの飼育を奨励した。現在ではゾーディ派でもドーリエ派でも多くの家庭が食用の家畜を飼うようになっている。ただし、私が観察したかぎりでは、成人した子供や孫をもつ年配の世代は今でも家畜の世話などはせず、年少の世代の者にやらせている。年配の人々は仏教により深く帰依しており、料理を作るときでさえ肉類に包丁を入れるのは子供や孫にさせる。また、市場で肉をさばきながら売買するのは大部分が漢族であり、タイ族は家で飼っている食用の家畜を生きのまま他の民族の屠殺業者に売ってしまうのが普通だという話を巷で何度か聞いたことがある。生産性という価値基準はこの 50 年でかなり行き渡ったようだが、それによって宗教的な価値観が完全に駆逐されたわけでもないようである。

ところで各県の県誌データを眺めていると、ブタの飼育の奨励は徳宏にかぎらず、少なくともいくつかの他の県でも行われていたことが分かる。60 年代から 80 年代にかけて、富寧、馬関、蒙自ほか多くの県で、農家に生きたブタを飼育させ、その肉の半分を国が買い上げる政策についての言及が見られる。同時にブタの病気の調査や品種改良など科学技術の向上によって増産を達成しようとしていることを示す記事も目立つ。

徳宏の状況と照らし合わせてここから予想されるのは、食糧増産は単純に数量的な問題ではなく、社会主義的な平等供給・平等分配のイデオロギー、科学技術による効率化の追求、宗教と科学を単純に対立させる発想に基づく宗教的習慣の改革といった価値観の塗り替えをともなっていたことである。例えば 1952 年から 65 年の農業合作化に関する徳宏の資料から受ける印象は、ひたすら生産性の向上を追求する発想が突出していることである。なかには生産性の向上に見合うようにいかに消費を拡大するかという視点から、タイ族の伝統的な食生活を変えようという論調のものもある [中共徳宏州委党史征研室編 1999: 59-60]。食生活を変えることに関しては、豚肉を生で食べる習慣を衛生の観点からやめさせようというキャンペーンも、徳宏ではさかんに行われている。

その意味で、「生活水準の向上、市場からの要求」という一見もっともらしい増産の理由についても、もう少しその意味を深く考察する余地があるように思われる。「生活水準の向上」には食文化の変容がからんでいるし、生産至上主義の思考回路では、供給を増やしたいがために需要を開拓する、という発想の逆転も起こる。市場からの要求が増えた背景には、農業に適した自然環境を持つ雲南の一部の地域が内地にとっての食糧基地と位置づけられたこと、人口増加、雲南への大量の漢族移民の流入、それも非農業人口の流入といったことを想定する必要もある。それらは人々の生活の生態的な条件を根底から変えてきたと考えられるのである。

2) ウマ、ウシ

ウマやウシはブタと同じく家畜であるが、どちらかといえば食用よりも、運搬、農耕などに使役されることが多かったようである。徳宏では1940年代前半の日本軍による戦禍のためにこうした大型の役用家畜の頭数が減り、建国後はその回復のための政策が行われた。1950年代には、タイ族は水牛や黄牛などのウシを精霊祭祀における供犠に用いていたが、政府はこれを資源の浪費と見なして事実上禁止したりもしている。また、例えば1963年の瀾滄では「大型家畜の繁殖が奨励され、繁殖年齢に達してかつ正常に成長している家畜に対して、ラバ1頭につき食糧12.5kg、水牛1頭につき食糧10kg、ウシとロバ1頭について食糧7.5kgが支給される」という政策が行われている。

しかしその後、食糧であるブタと違ってウマやウシに関する記述は徳宏においても、他の県誌資料でも少なくなっていく傾向がある。その原因はおそらく輸送手段や農耕の機械化が進んだためである。徳宏の場合、80年代から道路が整備されることで牛車や馬車はトラックにとって代わられた。トラクターの導入も同時に進み、どの家にも一頭はいた水牛がどんどん姿を消していった。一部で残った牧畜業は集約化され、一定の区画内での牧場経営へと切り替えられていく現象も見られる。それでも役用としての大型家畜の需要はどんどん減り続けているため、ウマは激減し、ウシは科学技術による食用牛への品種改良が試みられている。かつて宗教的な意味を担い、人間の畏怖の対象としての自然を象徴化する存在でもあったウシは、単なる食品や商品でしかなくなりつつあるようである。

3) トラ、ゾウ

先に挙げたような家畜のほかに、県誌には地域の自然を代表する象徴的な役割を担う野生動物の名前もいくつが挙がっている。例えばゾウは中国から見て西南方の風土を代表する珍獣として、古くから政治的な意味を担いつつ中国へ貢納されていたことが瑞麗県誌などに記されている。1951年1月8日の盈江県誌には、「蓮山[政府]はビルマからゾウ1頭を買い、蓋達土司署、蓮山行政委員会の名義で中央訪問団へ贈る」とあり、その伝統が新中国期にも引き継がれていたことが分かる。一方のトラは、歴史的にはやはり徳宏などの地域における政治権力を象徴する動物でもあったが、県誌では比較的最近まで害獣としての記述も目立つ。例えば江城の1956年の記事には、「宝蔵、曲水区で牛168頭、馬15頭、ブタ85匹がトラに咬まれて死ぬ」とある。また1973年7月の孟連では、ある男が「道中にトラとトラの子に遭遇したが、一頭は銃で倒し、続いて木の棒でトラの子を殴り殺して、トラを倒した英雄として褒め称えられる」と、まるで水滸伝のような記述もある。

しかしその後は傾向が変わり、1984年7月には孟連のある公社が「2頭の子トラを捕獲して昆明動物園に贈り、小孟、小連と名付ける」とあり、1978年4月の瑞麗県誌には「昆明動物園が弄島公社弄木東生産隊に人を遣わして動物買い付け所を建て、相次いでゾウ13頭を買う」とある。野生動物が鑑賞の対象に変わってきたことがうかがわれ、同時に希少化していることも予測される。

3. 今後の見通し

まだごく一部を閲覧したにすぎないが、こうした資料から予想されるのは、動物の多様な用途や意味合いの配置転換が急激な近代化のなかで起こっているということである。かつては祭祀用、運搬用、耕作用、軍用、それに害獣でもありえた様々な動物たちとその意味が、観賞用や食用といったところに収束しつつあるように思われる。

もちろん、こうした仮説を具体的に検証していくには、県誌の大事記部分だけでは明らかに限界がある。県誌の著者が重要だと思っていないことは書かれていないからである。しかし多くの県誌を参照して記述の不整合箇所を見つけ、他のより具体的な資料と組み合わせれば、県誌の限界そのものが逆にある種の資料となる。つまりそれは、行政に携わる人々の自然に対する認識のあり方がどのように偏っているのかを教えてくれるはずなのである。こうした観点から、現場と行政レベルの人々の動物観ないし生態観が具体的にどう変容し、それが現実の生態環境とどうリンクしているのかについて、研究を深めていきたいと考えている。

参照文献

中共徳宏州委党史征研室編 1999 『徳宏農業合作化史料』徳宏民族出版社.
雲南省潞西県誌編纂委員会編 1993 『潞西県誌』雲南教育出版社.

Summary

On the occasion of beginning research here, I plan to work on the subject of the change of ecological view and environment itself in the course of modernization in Yunnan, China. Materially, I intend to use the series of Annals published by every prefecture in Yunnan and focus on the relationship between humans and animals.